

少子化時代、 大学の新たな挑戦

少子化の進行に伴い大学全入時代を迎えるなかで、
学びの場が変わりつつある。
エリアを超えて有望な人材を集めるべく、
統合・連携、新学部創設と、
各大学は自らを変え、
生き残りを賭けた挑戦が続く。
関西の大学の新しい取り組みを追ってみた。





「21世紀懷徳堂」始動

「今、一番やりたいことは『社会学連携』です。大阪大学は企業との共同研究や技術開発といった『産学連携』にはずっと熱心に取り組んできました。しかし社会は企業だけで成り立っているわけじゃない。大阪という地で、大学と市民や企業が一緒になって、大阪の市民文化を復興させたい」

万博記念公園に隣接する広大な吹田キャンパスの中ほどに建つレンガ色の大学本部で、大阪大学総長の鷺田清一さんはそう語り始めた。

大阪大学の「社会学連携」事業は近年、加速度を増しつつある。例えば、大学ビッグバンとも言われる国立大学の法人化が行われた二〇〇四年四月、大阪大学発祥の地・大阪市中之島に「第三のキャンパス」中之島センターを開設。都心回帰を果たし、広く市民に開かれた「教育・研究、情報発信、交流」の拠点として運営し始めた。翌〇五年四月には万博記念公園内にコミュニケーションデザイン・センターを開設。大学の研究者と市民が互いに自由に語り合う「哲学カフェ」や「サイエンスカフェ」、さらには心斎橋のアップルストアを拠点にアート&テク



大阪大学

「社会学連携」で大阪の文芸復興に挑む



大阪大学吹田キャンパス。カフェテリアから大学本部を望む

ノロジの「知術」を人々にデリバリーする「知デリ」プロジェクトも軌道に乗せた。

そうした大阪大学の多様な「社会学連携」事業の情報を集約し、大阪を「国際学芸都市」として蘇らせる文化事業の推進母体として〇八年四月に開設したのが「大阪大学21世紀懷徳堂」である。

「大阪大学は、江戸時代にできた民間の学校、懷徳堂と適塾を精神的な源流としています。明治維新の志士を輩出した緒方洪庵の適塾の方が有名ですが、これはいわば武士の学校。それ以上に私たちが重視したいのは、町人による町人のための学問所・懷徳堂です」

鷺田さんによれば、懷徳堂は一七二四年（享保九年）に大坂の五商人が創った当時最高レベルの学校で、番頭から丁稚まで誰もが自由に学ぶことができた。

この学問的系譜の上に一九三一年、民間の支援のもと、医学部と理学部を擁する日本で六番目の帝国大学として創設されたのが大阪大学だ。その二年後、大阪工業大学（旧制）を統合して工学部を設置、戦後は旧制大阪高校や浪速高校を加えて新制大学となった。

このように、もとより府民の多様な学校をネットワーク化して成立した大阪大学は、昨春秋、やはり民間の寄付により大正期に創立された大阪外国語大学と統合した。民間との深い連携という、ともに似たDNAを持つ二大学の統合。アジアや東欧などの言語や文化に強い旧大阪外大の特色と、医学部や法学部など大阪大学の専門性を生かせば、例えば在留外国人をサポートする医療通訳や



大阪大学中之島センター。1階ラウンジでは懷徳堂と適塾の展示を行っており(上)、懷徳堂の模型も(中)。ここを都心の拠点として、市民とともに考える多彩な催しを実施(下)

司法通訳など「足元の国際化」を担う人材を養成できる。これが「地域に生き世界に伸びる」、大阪大学のモットーの具現化であり、外国人・学生にも魅力的な街づくりへの第一歩。素地が整った今こそ「原点」に帰って、市民とともに「知」のネットワークを構築し、大阪にかつての気概を取り戻して新たな市民文化を創りあげよう、というわけである。

街が人を育てる

近世以降、市民主導でまちづくりを行ってきた大阪だが、「戦後は一番大阪らしくないことをしてきた」と驚田さんは指摘する。「大阪の一番いいところは、政治でも経済でも、教育、学問、芸術でも、お上に任せたらアカン、何でも自分たちでやろうという精神です。ところ

が、戦後は全部お上任せで、受け身になってしまった」街自体ドーナツ化して住民が減少、街なかにあった大学のほとんどは郊外に移り、人々は学ぶためでなく、遊ぶため、消費するためだけに大阪に来るようになった。しかし、と驚田さんは言う。「会社員も昼間はその地域で働く市民であり、企業は企業市民としての責任がある。大学も研究や教育だけではダメ。だから、21世紀懷徳堂をベースに、大学と企業が市民として何ができるかを一緒に考え、社会学連携の新しい『阪大スタイル』を創りたいんです」

その手始めとして、今秋、中之島の地下を横断する京阪電鉄「中之島線」の開通に合わせ、新駅周辺にコミュニケーションワークショップを開設。周辺の金融マンなどを集めての経済学カフェや、アート、哲学のゼミなどを開催していくという。

「一方通行の公開講座はもう十分です。それはつい市民を受け身にしてしまう。むしろ見ず知らずの人のデイスカッションを通じて大阪の市民文化のレベルを上げていきたい。懷徳堂のようなレベルの高い市民の学舎ができれば、大学の先生も鍛えられる」と、驚田さんは笑う。

街が人を育てる。大学が地域文化の核になることで大阪の学芸と市民文化を復興させる。その街に集い、街の空気を呼吸することで、子供が、学生が勝手に育つ——そんな環境を創ることこそ大事ではないか。驚田さんが目指す「社会学連携」は、大学という枠を超え、大阪の街を確かに変えていきそうだ。

京都精華大学

「自由自治」の精神と「伝統社会」のすゝさ

京都市街の中心、烏丸御池交差点北西角に、元龍池たういけ小学校の瀟洒な建物を生かして二〇〇六年秋に開設された、国内初のマンガ博物館&図書館「京都国際マンガミュージアム」がある。毎週末、館内やテラス、人工芝の元校庭では、子供から若者、会社員、主婦、お年寄り、さらに世界各地の人々が大好きなマンガを幾冊も読みふけり、同館名物の「紙芝居」に熱中している。

このマンガミュージアムは、日本で最初にマンガ学科を、さらにはマンガ学部を開設した京都精華大学が京都市とタイアップし、元龍池小学校を設立した地元住民の理解と協力のもとに運営する施設である。

日本のマンガ・アニメは今やアジア・欧米はじめ世界中の人々を夢中にさせる、現代日本を代表する文化となった。しかしかつては「マンガなんて」と眉をひそめられていたことも事実。では、なぜ、京都精華大学にマンガ学部が、そして京都にマンガミュージアムが誕生したのか。

「一つには、京都精華大学の創設者が唱えた『自由自治』

マンガ学部からミュージアムへ





- ① 京都精華大学マンガ学部カートゥーンコースの人物デッサン実習授業
- ② マンガ学部アニメーションコースの実習授業
- ③ ストーリーマンガコースの実習授業
- ④ 京都精華大学キャンパス
- ⑤ 著名なマンガ家で、現マンガ学部長の竹宮恵子さん



そのため、マンガは世の中の権威、権力、アカデミズムからは疎まれてきた。「手塚治虫さんでさえ、『僕の絵はうまくない。百年後には認められない』と言ってました。でもアトムがいたから、NASAにも真似のできない、最先端のヒト型ロボットが日本で開発されたんです」

マンガの魅力・可能性に着目して、京都精華大学の美術科にマンガクラスが開設されたのは一九七三年だった。さらに九五年、芸術学部デザイン科マンガコースに、新

世代や地域、文化の相違を超えて誰もがマンガに惹かれるのはどうしてか。牧野さんによれば、「マンガはおしゃべりな象形文字」で、価値観の相違を超えた人間の本音や願望を、誰にでもわかりやすく絵解きして表現できるからだ。

「マンガ学」に新たな未来を拓く

京都精華大学の初代マンガ学部長で、現在、京都国際マンガミュージアムの国際マンガ研究センター長を務める牧野圭一さんはそう言って、鳥獣戯画や歌舞伎、さらには世界的な先端企業を生み、育んできた京都の特色について触れた。

の精神が、マンガを『異端』『サブカルチャー』と忌避しないで論じる風土を育んでいたこと。それから、やはり京都のすごさですね。京都は千年を超える伝統のある社会で、その背景には常に『時代の最先端』を受け入れ、生み出す包容力が潜んでいます」

聞で辛口の政治風刺マンガを描いていた牧野さんがやってきた。しかし当時、「マンガコース」といっても「カートゥーン」（一コママンガ）だけだった。自由奔放なマンガの世界すべてを対象とする部門へ——京都精華大学は二〇〇〇年春、芸術学部マンガ学科を開設した。新設されたマンガ学科には、カートゥーンだけでなく、ストーリーマンガ、アニメーションなどの分野が置かれ、著名な現役マンガ家が多数教授陣に加わってきた。その一人が、『地球（テラ）へ……』など多くの作品で知られる現マンガ学部長の竹宮恵子さんだった。

「竹宮さんがフランスのエルメス社の社史『エルメスの道』を真剣に描かれているのを知って、僕は『エルメス社の社史を描くことができるノウハウを学生たちに教えたいと思いませんか』と誘ったんです」

牧野さんによれば、マンガの創作はよほど才能とチャンスに恵まれないと大成するのは難しい。しかし、企業や市町村の歴史、先端医療や技術など、マンガでリアルに描くことができる分野は多様で幅広い。それだけ「マンガ学」専攻の学生たちの将来も開けていく。

〇六年春、マンガ学科はマンガ学部へと昇格、同年十一月、京都市内に世界に開かれた京都国際マンガミュージアムが開設された。今後は、アトムが世界最先端のロボット技術のヒントになったように、「産学官連携によるビジネスモデルの研究・開発、つまり新産業の創出にも取り組んでいきたい」と牧野さんは新たな夢を膨らませる。



- ① マンガ単行本約5万冊が配架されている全長140mの書架「マンガの壁」
- ② 京都精華大学名誉教授で京都国際マンガミュージアム国際マンガ研究センター長の牧野圭一さん
- ③ 元校庭前のテラスでマンガを読みふける



和歌山大学

「観光」で地域を創造する

世界遺産を糧に

二〇〇八年四月、和歌山大学に国立大学初となる「観光学部」が開設された。

観光学部は前年新設された経済学部観光学科を発展させたもので、観光関連産業の発展に携わる人材を育成する「観光経営学科」と、観光行政などの企画立案ができる人材を育成する「地域再生学科」の二学科で構成され、北は北海道から南は九州・奄美大島まで、従来和歌山大学がベースとする西日本をはるかに超えた地域から多くの志願者が集まり、一気に高い倍率を記録。

この新学部構想を、和歌山大学学長の小田章さんが公表したのは〇四年春。ちょうど国立大学法人化直後のことだった。同年四月から、観光学科・観光学部設置準備に取り組んできた、現副学長で観光学部教授でもある小畑力人さんによれば、「法人化によって、旧帝大と地方国立大学の格差が一段と可視化するなかで、和歌山大学の取り組んだオンリーワン戦略の中軸が、観光学部の開設でした」



和歌山市北郊の山麓にある
和歌山大学キャンパス

もともと、「観光学部構想」は単に大学だけでなく、

豊かな自然と歴史を生かした和歌山県活性化の起爆剤に、という、いわば県民の悲願が込められていた。今春、観光学部長に就任した大橋昭一さんによれば、八年前、和歌山市が地域活性化のため「公立和歌山創造大学構想」を打ち出した時、設立準備委員会のメンバーでもあった小田さんが唱えた「観光創造」案がその原点。「地域創造にはいろんな方法があるでしょうが、今の時代に工場誘致的なものほそぐわない。観光もかつての団体旅行のようなものは自然破壊につながる。環境と観光をいかにつなげ、地域創造を図っていくか」と、小畑さんと大橋さんは言う。

和歌山大学の「観光学部」構想が世に出た直後の〇四年七月、「紀伊山地の霊場と参詣道」（熊野三山、高野山、吉野・大峯の各霊場と、熊野参詣道、高野山町石道、大峯奥駈道の各参詣道）がユネスコの世界遺産に登録された。これを機に和歌山県が有史以来育んできたユニークな歴史風土への興味関心が高まり、同年の年間観光客数は初めて三千万人を超え、外国人観光客数は前年比八〇％増という驚異的な伸びを示した。そんな状況のなか、地元行政や産業界、住民の間で「観光学部」構想への期待が高まり、大きな後押しとなった。

「精神は日本・言葉は英語」で

では、具体的に和歌山大学観光学部が目指す「観光に



- ①和歌山大学キャンパス
- ②和歌山大学観光学部長の大橋昭一さん
- ③和歌山大学観光学部
- ④日本文化を肌身で学ぶ、観光学部の茶道実習授業
- ⑤和歌山大学副学長で観光学部教授の小畑力人さん
- ⑥日本について書かれた英語テキストを使った、観光学部の英語授業





関西学院大学の西宮上ヶ原キャンパス

「教育」の新たな試み 関西学院大学

幼児教育、初等教育、臨床教育を一体化

関西学院大学の母体「関西学院」は明治半ばの一八八九年、神戸の外国人居留地で活動していたアメリカ人宣教師ウォルター・R・ランバスが、現神戸市灘区の「原田の森」に建てた木造二階建ての小さな私塾として始まった。やがて西宮市上ヶ原の現在地に移転。一九三二年に関西学院大学が設置され、今や九学部を擁する。そして創立百二十周年にあたる二〇〇九年春、私立大学としては数少ない教育学部の開設を目指している。教育学部開設準備室長を務める、関西学院大学副学長の芝田正夫さんは、「内外ともに混迷を深める現代、次代を担う人材を育てるため関学を創ったランバス先生の建学の理念に立ち返り、教員や保育士はじめ教育に関わるさまざまな分野で活躍できる人材を、私立の総合大学という特色を生かして養成していきたい」と語る。

開設予定の教育学部は、「臨床教育学科」と「幼児・初等教育学科」の二学科からなる。うち「臨床教育学科」は、現在、文学部総合心理科学科に所属する「臨床教育

よる地域創造」とはどのようなものだろうか。

大橋さんは、「通常のマーケティングは、消費者が欲しいものをつくることです。でも、観光では、例えば熊野古道を消費者の望むように変えるわけにはいかない。そうすると、私たちが熊野古道の新しい魅力を発見して、一般の人々にわかってもらいうようにしていく必要がある。そこに大学の観光学部の大きな使命がある」と言う。

小畑さんは、和歌山には観光資源は多いのに、各地バラバラに点在している、と指摘する。「例えば有田市には長良川より古式の鵜飼があります。隣の湯浅町は日本の醤油発祥の地で二年かけて本物の醤油を造っている。また、海南市は漆器日本三大産地の一つ、紀州漆器がある。それらを観光学部の学生たちがフィールド調査し、うまく関連づけて相互の魅力を高め、寂しくなっている地域に活気をもたらすことができれば」と熱を込める。

そのような学生を育てるため、観光学部では日々の授業に茶道や華道を取り入れ、「着物文化論」の発表会では学生が自ら着物を着て、和歌山市内の商店街で着物ショーを披露し、注目を集めた。幾千年にわたって蓄積されてきた文化を肌身で学ぶことが大切というわけである。また、観光や日本文化に関わる実践的な英語力習得にも力を入れる。「日本から毎年千七百万〜千八百万人が海外に観光に出かけるのに、外国人観光客数は最近かなり増えたといってもまだ年間八百四十万人ほど。いかに外国人観光客を誘致して、リピーターにしていくなか」と小畑さんは言う。続けて大橋さんは、「わが観光学部のモットーは、『精神は日本・言葉は英語』。そういう人材を輩出し、国内ばかりか世界各地の国際機関に行き、大いに活躍してほしい」とつけ加えた。

- ①②熊野古道「中辺路」
- ③現在の熊野本宮大社の入り口に建つ鳥居
- ④日本のナショナルトラスト運動の先駆となった、和歌山県田辺市の「天神崎」





聖和大学 (来春、関西学院大学教育学部の聖和
キャンパスとなる予定) のシンボル・4号館チャペル

学専修」を分離、発展させ、学級崩壊やいじめ、不登校など難題が山積する状況下の子供と保護者、教育者支援のあり方を追究していくことになる。

一方、「幼児・初等教育学科」の母体となるのが、来春、関西学院大学と合併する、同じく明治期、ランバスゆかりの人々により創設された聖和大学である。

関学・上ヶ原キャンパスから徒歩約十分の聖和大学の幼児教育学科は一九六四年、幼児教育分野では日本初の四年制学科として開設され、長い歴史と実績を持つ。また同大学キャンパスには、聖和幼稚園、児童相談研究所、聖和乳幼児保育センターも付設されている。

さらに今年（〇八年）四月、宝塚市の宝塚ファミリーランド跡地に関西学院初等部が開設された。芝田さんによれば、それら施設との連携によって「現場体験」に根ざした確かな「子ども理解」に基づき、幼児教育と初等教育、臨床教育を一体化させた、実践力、応用力の高い、教育研究活動を展開していくとのことだ。



- ① 関西学院大学副学長で教育学部開設準備室長の芝田正夫さん
- ② 関西学院大学の西宮上ヶ原キャンパス
- ③ 08年4月、宝塚市内に開校した関西学院初等部
- ④ 聖和大学に隣接する聖和幼稚園
- ⑤ 聖和大学に隣接する聖和乳幼児保育センター



なかでも重視しているのが、体験型学習である。「教育学部の学生は、一年生の時から、教育実習だけでなく、幼児・初等教育者に必要ないろんな実習を体験させます」。芝田さんは、教育学部の学生が、文学部や法学部、経済学部など他学部の授業を受けることで、学部の壁を超え、また環境問題など教育者として必要不可欠な、幅

広い知識と関心を持つ人材に育てることができる、と言う。

関西学院大学では、中学・高校の教員免許を取得して教職に就く学生が毎年百人ほどいて、現在、各地の学校現場で三千人近くが現役教員として活躍している。彼ら卒業生たちといかに連携していくかが今後の課題だ、と芝田さん。

開設予定の〇九年四月まであと半年。「現実には保育士も幼稚園教員もこれまで女性が圧倒的に多く、現場では男性の保育士、教員の増加が期待されています。女子学生だけでなく、男子学生にもどんどん入学してほしいですね」。それが実現すれば、現在、女性中心の職場となっている幼児教育現場の活性化にも貢献しそうです。

一方、企業でも新入社員の早期退職者の増加などへの対策から、臨床教育学など問題解決型の知識・技能を持つ卒業生が企業内で果たす役割への関心が高まりつつある。時代や社会の変化に合わせ、新たな「教育の時代」がやって来た、と言えるかもしれない。

大学、大学院から高等部、中学部、そして今春開校した初等部を擁する総合学園「関西学院」と、大学、大学院、短大、幼稚園を擁する「聖和大学」の合併。創立百二十年に向け、関西学院は一貫教育をさらに充実させているようだ。



- ①中之島通りから「ほたるまち」を望む
- ②堂島川を挟み、左(北)に慶應大阪リバーサイドキャンパスのある「ほたるまち」、右(南)に大阪大学中之島センターが向きあう
- ③「ほたるまち」にある福澤諭吉誕生地の碑
- ④大阪大学中之島センター

●
 関西の大学が新しい取り組みを進めるなか、東京の私大の関西進出も注目を集めている。大阪大学の都心回帰の拠点・中之島のほど近く、大阪大学医学部付属病院跡地の再開発地区「ほたるまち」に、〇八年五月、慶應義塾大学の大阪リバーサイドキャンパスがオープンした。関西地区における慶應義塾の情報発信や交流の拠点という機能を持つ。なお、創立者の福澤諭吉の誕生地記念碑はキャンパス近くにある。一方、早稲田大学は、関西大学と学術交流協定を結んだほか、関西の中・高校の系属化を積極的に推進。関西経済連合会にも入会するなど、関西での存在感を強めつつある。

もちろん関西の各大学も首都圏でのサテライトキャンパスを次々オープンさせており、エリアを超えた大学間の競争・切磋琢磨は一段と進展。こうした学びの場の活性化が、次代を担う人材づくりに大きく寄与することを期待したい。

取材・撮影／伊田彰成 編集／田窪由美子